

# 『陸軍将校たちの戦後史： 「陸軍の反省」から「歴史修正主義」への変容』

角田療\*著、新曜社、2024 年

一ノ瀬 俊 也†

戦後日本をそれなりにリベラルな価値観のもとで生きてきた男性が、老境に達したある日、とつぜん右傾化して南京事件は捏造だなどと言い出す……。これは SNS などではなれば都市伝説のように語られるところの「帰省したら父がネット右翼になっていた」話ではない。日本陸軍の士官学校卒業生によって構成される団体・偕行社の会員たちの話である。

「エリート」たる元陸軍将校たちは戦後社会のなかで、自身の戦争体験とどのように向き合ったのか。責任ある立場にあった将校たちの戦後史を考えることは、「日本の戦争責任や、戦後の戦争への向き合い方を考えることにつながるのではないのか」（3 頁）というのが本書の主たる問題意識である。

本書はこれまでの戦友会・戦争体験研究における「元エリート軍人をめぐる研究の不在」を指摘し、偕行社の戦後史を①会の中心世代／世代間の相違、②会の資産／社会関係資本、③政治との関わり、④戦後社会から陸軍への眼差しの 4 つの分析軸から明らかにする。主たる資料は偕行社の会誌『偕行』である。

第 1 章「偕行社の再結成」は、敗戦でいったん解散した陸軍将校の親睦団体・偕行社が 1952 年に「偕行会」として再結成（57 年偕行社に改称）され、のちに『偕行』となる会誌『月刊市ヶ谷』を発刊するが、会は軍内で昇進しそれなりの地位を築いていた「古い期」と、彼らの施策のせいで大量の戦死者を出し、出世することもなかった、もしくは士官任官前に敗戦となり戦場へ出ることもなかった「若い期」の対立をはらんでいた。彼らは陸軍に批判的な戦後社会に配慮して政治との関係を極力控えたが、同時に上の期が下の期に対し、陸軍にとって不利となる歴史証言をすることへの統制・監視にもつながった。

第 2 章「会の大規模化と靖国神社国家護持運動」は、偕行社の会員がしだいに増加し、自らの「エリート性」を確認していく過程を描く。彼らは出身期ごとに同期生会を組織して『偕行』誌上の「花だより」と称する近況報告欄で交流を深めるが、戦後社会で成功を取められなかった者には敷居の高い集まりとなっていた。彼らは 1960 年代から 70 年代にかけて盛んとなった靖国神社国家護持運動に加わるが、実現することはなかった。

---

\* 立命館大学立命館アジア日本研究機構専門研究員

† 埼玉大学教養学部教授

ichinose@mail.saitama-u.ac.jp

第3章「『歴史修正主義』への接近と戦後派世代の参加」は、会員たちが繰り広げた2つの内部対立を描く。1つは経済的成功を収めた者とそうでない者、もう1つは南京事件についての認識をめぐる対立である。陸士42期、元陸軍中佐の加登川幸太郎は南京事件について『偕行』誌上で元陸軍関係者としての「反省」の弁を述べ、89年『南京戦史』を刊行したが、若い期はこれに反発し、南京事件の存在を否定する「歴史修正主義」に傾斜していく。そのような偕行社も会員たちの高齢化という現実の前に、戦後世代である自衛隊出身者を迎えて会組織の存続を図るか、解散するかを選択を迫られていく。

第4章「同窓会から政治団体へ」は、偕行社が会員数の減少を補うため、2011年に公益財団法人化し、元陸上自衛官の取り込みに動く過程を描く。偕行社は元陸軍将校と元陸上自衛隊幹部の合同組織となり、2024年4月に「陸修偕行社」を名乗る。

終章「『陸軍将校の反省』の可能性と限界」では、偕行社における世代間相違について、どの期が会の中心となるかによって、政治的態度が異なったとの結論を示す。1970年代に若い期が中心となると古い期の責任追及がはじまり「陸軍の反省」も語られる。しかし1990年代になると若い期は社会から、「侵略戦争に加担し、加害行為を行った」(172頁)責任を追及されはじめる。そこで最若年期は自分たちへの批判を回避し、かつ自分たちの青春時代を肯定するために「歴史修正主義」に接近し、偕行社は政治団体化していく。若い期と最若年期は元自衛官の受入をめぐっても対立するが、結局自衛官が陸修会という団体を作ったうえで、偕行社と合併することにより会員の増加がはかられた。

本書はその意義として、①戦争体験者が「歴史修正主義」という過激なナショナリズムに接近していく力学を明らかにしたこと、②最若年世代という軍隊に所属しただけの世代の戦後史、彼らの戦争観の変遷を明らかにした点、③戦争の中枢を担った元陸軍将校たちの戦後の思考を炙り出したこと、④戦友会という組織において、資産がどのような働きをしたのかを明らかにした点を挙げるが、これらはおおむね首肯できる。もっとも重要なのは①であろうが、本書は歴史認識をめぐる世代間対立の有様や変化をていねいに描いており、同じ士官学校卒業者であってもけっして一枚岩ではなかった点の指摘は、研究史に対する重要な貢献である。元将校たちが高齢化するにつれて下の世代から疎外されていくありさまは、一つの人間ドラマをみているようでたいへん興味深く読んだ。④の資産の問題について、本書は元将校たちの右傾化を指摘するが、彼らは一方で手持ちの歴史資料を靖国神社に寄贈して1999年に偕行文庫をオープンさせており、評者もときどき研究に利用させてもらっている。それは『南京戦史』以来のある種の歴史実証主義の持続ともいえ、「陸軍の反省」から「『歴史修正主義』」への転換という図式は若干整いすぎているようにも思える。

ところで本書は124頁で、偕行社会員(以下会員)・佐藤晃(陸士61期)の1996年『偕行』誌上における「陸軍の反省もよいでしょう。只それは、陸軍悪玉論に利用され、東京裁判史観の固定化に貢献し、日本唯一悪玉論に拍車をかけることになります<sup>1)</sup>」という主張を引用している。これは本書の主題である将校たちの意識変化をもっとも簡潔明快にあらわしたものといえる。評者はこれに何か付け加えられないかと思い、1996年刊行の『偕行』12冊をひもといてみた。そこで感じた疑問点や今後の課題を3点挙げることで、コメントにかえたい。

<sup>1)</sup> 佐藤晃「陸軍悪玉論に対する『偕行』の使命」『偕行』1996年3月号、14頁。

### ①元将校たちが「修正」したかった「歴史」とは何か

本書は歴史修正主義という用語にサブタイトルをはじめほぼすべて「」を付しているが、その意図がよくわからなかった。評者は、論者がある用語に「」を付けるのは、「いわゆる」を付すのと同様、一般的な定義や理解とは異なる独自の意味をまとわせるためと認識しているが、どのようなのだろうか。

それはさておき、前出の佐藤晃は96年『偕行』への投稿で続けて

日本が米国との開戦に至った経緯は明治39年の対米戦備増強計画以来の建艦競争にあり、敗戦の主因は戦略はおろか情報・後方輸送にも無知な海軍の体質にあります。軍事専門集団の偕行社が、「東京判史観の是正」はおろかこの軍事的事実すら解明出来ず「日本唯一悪玉論」の核心的基盤にされたまま終焉を迎えるのですか。

と訴えている。佐藤は『帝国海軍の誤算と欺瞞』（星雲社、1995年）など、海軍の戦争責任を追及する著作を複数のこしており、彼がどうしても修正したかった「東京裁判史観」とは、実は陸軍だけが対米開戦の責任をおわされ、本来応分の責任をとるべきであった海軍はあたかも戦争に反対したかのように理解されるところの「海軍善玉史観」ではなかったか。近年の歴史学研究でも対米開戦過程に海軍の果たした役割が重視されていることを思えば、その修正は「『歴史修正主義』」「過激なナショナリズム」とまでいえるものなのだろうか。

「海軍善玉史観」への批判は会員の吉田正人（60期）<sup>2</sup>も述べている。「あるカラオケパブで戦中派が軍歌を始めたら、となりの席のキャリア・ウーマン達から『ヤメテヨ。軍国主義はイヤッだわ』と金切声が飛び出し」たので、彼らは「非常識を認め」て一緒に談笑をはじめた。陸軍と海軍のどちらだったかと聞かれて陸軍と答えると「相手は『あらそう。太平洋戦争は海軍さんは反対したのに陸軍さんが強行したって。先生方から聞かされたけど、先輩は責任を感じてますか』」と言われ「戦中派絶句してしまう」。吉田によれば、悪いのは彼女たちではなく「日本だけを悪者にした東京裁判史観だけをうのみ〔に〕した学校教師」や「進歩的文化人と自負する人達」であり、元将校としては戦後50年ものあいだ「放置された事態を少しでも克服できれば」という（太字は原文ママ）。

元将校たちは南京事件を否定している、よって「『歴史修正主義』」だという図式的理解は総論としては正しいのだろう。だが、彼らが「修正」したかった「歴史」とは何だったのかについてより深く追求していくことは、将来的に、陸海空の各軍という軍事組織の内部における将校たちの対立関係や対抗意識という、より高次かつ普遍的な論点の設定にもつながっていくかもしれない。そのような対立は、現在の陸海空自衛隊の間にも多かれ少なかれ存在するはずである。

### ②南京事件はなぜ否定されねばならなかったのか

会員の井出宏（軍2—満洲国陸軍軍官学校2期）<sup>3</sup>は1996年4月1日に開館した長崎原爆資料館について「『戦争中の日本の加虐行為』も展示しようということで賛否両論が湧き、一度決まった「南

<sup>2</sup> 吉田正人「何も知らない新世代：愚痴はやめよう」同5月号、17頁。

<sup>3</sup> 井出宏「奇怪な資料館」（同6月号、16・17頁）。評者には当初「軍2」が何を指すのかわからなかったが、井出の「九七戦でB29を特攻撃墜」（同2008年3月号、34頁）に「修武台〔航空士官学校〕で教育を受けた軍校1期（56期）2期（57期）が居た」云々とあるので陸士57期相当と判断した。



京事件」の写真が差し替えられて二転三転し」「原爆資料館はイデオロギー的主張や政治的思惑によって掻き回されたのである」「『南京虐殺』は東京裁判においても確たる証人もなく何に一つとして歴史として確定されていない」「歴史を歪め日本を嫌悪させる資料を展示して自国民を自虐自嘲して喜んでいる似非文化人がそれを煽っている」などと批判している。彼の先輩が行った「陸軍の反省」などははなから眼中にないようであり、ここでの東京裁判（史観）は自己の歴史観を否定どころか肯定してくれる存在である。ご都合主義といってしまうばそれまでだが、将校たちが批判というより敵視した「東京裁判史観」とはいったい何だったのか、と問うことはできるだろう。

より大事なことは、少なくとも彼らの認識のなかでは、元将校は社会の少数派に過ぎず、社会の歴史認識を定める主導権はリベラルな「文化人」に握られていることだ。じっさい同資料館の展示は、直近の新聞報道によると「『南京占領、大虐殺事件おこる』と年表に記すなどして」おり、それから30年たった見直しの「最終案には1937年12月の旧日本軍による南京大虐殺について記載がなかった」<sup>4</sup>とのことである。少なくとも30年の間「南京虐殺」は同館に展示されていたのだ。元将校たちがなぜある種の被害者意識をもって南京事件を否定せねばならなかったのかについては、本書も彼らが「『侵略戦争』に加担した責任を追及される立場になった」点を指摘している（125頁）けれども、各時代の社会ではどのような歴史認識が主流であったかなど、社会的・文化的背景を踏まえた分析が必要ではないか。

### ③自衛隊幹部は陸軍をどうみていたのか

会員の和田盛哉（41期）は戦後陸上自衛隊に入隊し、陸将・西部方面総監で退官した人であるが、1996年の『偕行』誌上で自衛隊の靖国神社や千鳥ヶ淵戦没者墓苑参拝についての所見で「自衛隊の墓苑参拝は、皇族方の視閲を受ける数少〔な〕い機会であり、また、国防のための身命を賭すべき隊員に対する精神教育上も必要なことを忘れてはならない」<sup>5</sup>と書いている（太字は原文ママ）。この記述は、自衛隊幹部が旧軍関係者との交流に何を期待していたのかを示す手がかりになる。本書は元自衛官がどのような「自衛隊」体験に基づいて陸修偕行会に参加しているのかは今後の課題とする（177頁）一方で、自衛隊幹部が旧軍の問題点を「教訓」として冷静な目でみていたと述べている（158頁）が、逆に「国防」の担い手として「精神教育」上の示唆を得るために交流を求めた面もあったのではないか。他方で元自衛隊幹部が「東京裁判史観」をどう認識していた（いる）かも重要だろう。彼らが「同盟国」たる米国とおおよそ正反対の歴史観を少なくとも建前上どこまで公言できた（できる）かという問題があるからだ。

なお、本書は陸軍（将校）と陸上自衛隊（幹部）の連続よりも断絶に注目しているようだが、和田のような元将校にして自衛隊の高級幹部となった人びとが両集団の結合にあたり、どのような役割を果たしたのかも興味をひかれる。

<sup>4</sup> 『毎日新聞』地方版 2025年3月7日「原爆資料館 展示更新『基本設計』最終案『南京大虐殺』記載なし／長崎」  
<https://mainichi.jp/articles/20250307/ddl/k42/040/248000ct>（2025年3月10日閲覧）

<sup>5</sup> 和田盛哉「神社・墓苑と自衛隊の参拝」『偕行』1996年5月号、35頁。